

伝統的水利技術の棚田の米をブランド化し、オーナーにも販売

5. 北庄の棚田【岡山県久米南町】

範	囲	標高 350 ~ 450m程度の丘陵地斜面に広がる棚田一帯 (棚田面積 88ha)	
所	在	岡山県久米南町北庄	
生	物	アカマツ林	
環	境	要素 水田(), ため池	
自然条件	地	形	平均勾配 1/7.5 の傾斜地で「耕して天に至る」の表現の如く地域の最高峰にため池があり、約 2700 枚の棚田が広がる。
	植	生・生物等	久米南町は、なだらかな高原状の丘陵地に森と田園風景が入りまじる豊かな里山の自然に恵まれている。
		 <p>撮影時期：2002年9月 北庄棚田の代表的な景観で、この角度から撮影されることが多い。</p>	
社会条件	人口(市町村)	5,298人(農家率42.5%、副業的兼業農家が多い)	
	土地	利用 町総面積の15.8%が田畑、66.8%が山林である。 対象地区は、米作を中心とし、3営農組合があり、全92戸の農家により棚田が耕作されている。	
	歴史・文化	久米南町は川柳の町として、また、法然上人誕生の地としても有名で、自然と文化に恵まれた町である。主な産業は、米作を中心とする農業で、ぶどう、葉たばこ、しいたけ、野菜などの生産も盛んである。北庄の棚田は明治～昭和20年頃にかけて開墾された。	
法指定、行政による評価の状況	自然環境・景観保全や国土保全に関わる地域指定等	該当なし	
	すぐれた自然、景観、伝統文化などとしての選定	農水省「日本の棚田百選」(H11) 岡山県「田んぼの学校モデル推進地区」に認定(H14) 「くめぐん広域営農連絡協議会賞」受賞(H15) 「田んぼの学校企画コンテスト」入賞(H16) 農水省、農村環境整備センター「田園自然再生コンクール 子どもと生きもの賞」受賞(H18) テレビ放映(西日本テレビ、山陽放送)	

取組主体	タイプ	地元集落等:集落、地権者など地元の関係者が中心となった取組		
	主な主体	名称	概要	
		北庄地区3営農組合		
経緯	県行政による棚田栽培の継続を目的とした事業(「棚田天然米生産地育成事業」「棚田地域営農条件等整備事業」)がきっかけとなり、その後棚田百選に認定されるなど、景観が評価されたことで棚田の保全が地域の活力に繋がることが住民に理解され、事業終了後は地域の有志で活動を継続している。			
支援措置	岡山県「棚田天然米生産地育成事業」「棚田地域営農条件等整備事業」			
取組の目的・目標	耕作条件の厳しい棚田で生産する農産品の価値を高めることによって生産を継続するとともに、日本有数の規模を誇る棚田景観を保全していく。			
取組分野内容	農林業を通じた里山や草地の利用(管理)の維持・活性化	北庄地区は久米南町でも標高の高い地区であるが、多くのため池があり、そのため池や水路を各水利組合が管理している。都市との交流と地区の活性化を目的に、交流館「棚田の里 北庄」を町が設置している。北庄中央地区の棚田天然米生産組合では、3㍍以上の棚田での栽培と有機低農薬栽培・天日干しを条件とし、「今搾米」のブランドで販売しており、年間契約者や関西地区の米問屋と販売契約するなど販売ルートも拡大しつつある。棚田のオーナー制など外部の人からの金銭面・労力面の支援を得られる仕組みも検討している。		
	バイオマスなど新たな資源としての利用	【対象となる資源】 該当なし		
	環境教育や自然体験、エコツアーの場としての利用	自然観察会		
		環境教育・学習活動	元誕生寺小学校において、体験学習として、田植え、稲刈りを行っている(「田んぼの学校」)。年末にはお正月のお飾り作りと餅つきを行っている(北庄中央棚田天然米生産組合)。	
		里地里山体験・環境保全		
		農林業体験活動		
		エコツアー		
その他	都市部の人たちによる「棚田ファンクラブ」を結成(北庄中央棚田天然米生産組合)。			
野生動植物やその生息地の保全・管理	該当なし			
地域の良好な景観の保全・修復	棚田は北庄地区内の3営農組合が中心となって耕作されている。施設のため池や水路の管理は各水利組合が行っている。北庄中央地区では棚田天然米生産組合を組織し、景観保全に努めている。			
里地里山の伝統的な生活文化の知恵や技術の継承	対象	生活行事	【文化財指定】	
		資源利用技術		
		その他		
該当なし				
連携・協働	北庄中央棚田天然米生産組合と地元小学校とで農作業体験学習を実施。 JAつやま(米の販売)、地域住民(交流イベントへの協力)			



撮影時期：
地元小学生を対象にした体験学習(田植え)

撮影時期：

景観としての
利用・評価

観光パンフレット等に写真が使用されている
風景探勝や撮影の来訪者が多い

取組の特徴

住民が棚田景観の価値に気付き、米の地域ブランド化など棚田の維持に積極的に取り組んでいる。
今日まで棚田での耕作が維持され、日本有数の規模の棚田景観が形成されている。
県行政による事業(「棚田天然米生産地育成事業」「棚田地域営農条件等整備事業」)をきっかけに、住民に棚田景観の価値が認識され、棚田での耕作を積極的に継続していこうとする動きが生まれている。

【参照資料】

田園自然再生活動コンクール H18

久米南町HP (<http://www.town.kumenan.okayama.jp/main.html>)

社団法人農村環境整備センターHP (<http://www.acres.or.jp/>) 日本の棚田百選一覧